

政務活動実施報告書

令和7年4月10日

村上市議会議員 三田 敏 秋 様

会派名 至誠クラブ

代表者名 渡辺 昌



当会は、下記のとおり政務活動を終了しましたので報告します。

	経理責任者氏名	富 樫 雅 男
用 務 名	① 東京都荒川区「ゆいの森あらかわ」について ② 「道の駅川場田園プラザ」について	
実 施 日 時	① 令和7年3月25日（火） 9時30分～11時00分 ② 令和7年3月25日（火） 14時30分～15時30分	
用 務 先	① 東京都荒川区 ② 群馬県利根郡川場村	
参 加 議 員 名	渡辺 昌 富 樫 雅 男 三田敏秋	
全体参加者数	3 名	
概要及び所見	※記載欄が不足する場合は別葉に記載すること。 [別紙] 参照	
備 考		



[別紙]

① 東京都荒川区 「ゆいの森あらかわ」について

荒川区立「ゆいの森あらかわ」において、荒川区議会議長及び荒川区地域文化スポーツ部長から歓迎の挨拶を受けたのち、担当課職員から施設の概要等について説明を受けながら見学し、その後質疑応答を行った。

■施設の概要

平成 29 年（2017 年）3 月に開館。地上 5 階、地下 1 階（駐車場）で、敷地面積 4,100 m²、延床面積 10,900 m²。「中央図書館」「吉村昭記念文学館」「ゆいの森子どもひろば」の 3 つの機能が一体化・融合し、あらゆる世代が活用できる複合施設となっている。館内は、1 階から 5 階に向かって、また、中心から外側に向かい、賑わいから静寂へ変化する滞在型の読書空間となっている。

[中央図書館]

～赤ちゃんから高齢者まで、全ての世代に新たな発見と読書の楽しみを提供する場～

区立の中央図書館として、約 60 万冊の蔵書規模を有し、全ての世代の読書活動や課題解決の支援と地域の情報発信の拠点となっている。ゆったりとした閲覧席（900 席以上）が各フロアに設置されている。

そのほか、3 万冊の蔵書規模で子どもの遊び場と連結する「えほん館」、区政の発信や地域の発表など様々なイベントの開催や普段は閲覧室として利用されている「ゆいの森ホール」（128 席）がある。

[吉村昭記念文学館]

～作家・吉村昭を感じ、文学に親しみ、文化を育む空間～

荒川区出身の著名な小説家、吉村昭氏を紹介する施設。常設展示が 2 階から 3 階にかけて 9 つのゾーンで構成されている。生前使用していた書斎の再現展示では、自由に座り創作空間を体感することができる。



[ゆいの森子どもひろば]

～子どもたちの夢や生きる力、子育ての喜びや楽しさを地域ではぐくむ荒川の未来づくりの拠点～

遊びラウンジでは親子が安心して過ごすことができ、子育て世代のコミュニケーションの場を提供している。好奇心旺盛な乳幼児の想像力や集中力を養える様々な遊具を揃えている。また、様々なテーマの子育て講座を開催するほか、常駐の保育専門員が子育ての相談に応じている。館内利用者を対象に、乳幼児一時預かりサービス（有料）も実施している。

学びラウンジでは、科学実験やワークショップを開催して子どもたちの夢や生きる力を育てている。

■施設整備に至った理由

老朽化した荒川図書館の建替えと中央図書館整備の課題、吉村昭文学館の図書館との併設に向けた課題、屋内でも安心して遊べる子育て支援の拠点づくりの課題があったが、それらの課題を

解決することが可能な用地（旧メッキ工場跡地）を取得することができたため、中央図書館、吉村昭記念文学館、子どもひろばの3つの機能を有する複合（融合）施設として整備に至った。

■ネーミングの由来

区民に末永く愛され、親しまれるものとなるよう、平成26年度に施設の愛称を募集し、応募作（419点）の中から選定委員会で選定した候補作5点を対象に区民投票を実施。区民投票（総数15,620票）の結果を参考に、選定委員会で厳正なる審査を行った結果、『人と人、本と人、地域と人、文化と人が結びつき、楽しみ・学び・安らげる、豊かな森のような施設』となるよう、愛称を「ゆいの森あらかわ」に決定した。

■施設の運営方法及び利用状況

直営で運営している。直営のメリットとして、施設運営にあたって区民の意向や要望が反映しやすく、より良いサービスが提供できる点や、読書活動の推進に取り組みやすいことが挙げられた。図書館の地域館も含め、全ての図書館を直営で運営しているのは、都内23区では荒川区のみであるとのこと。

職員体制は合計85人で、ローテーションによって業務を行っている。そのうち常勤の正規職員は20人で、それ以外の方は会計年度職員となっている。また、植栽管理のための園芸ボランティアやブックスタートボランティアのほか、読み聞かせ、布の絵本づくり、音訳、図書資料の修理など、様々なボランティアの方が活動している。

施設の利用者数は年間68万人ほどで、一日当たりの利用者数は約2千人。日曜及び祝日は3千人を超える日もある。

■災害時の防災拠点

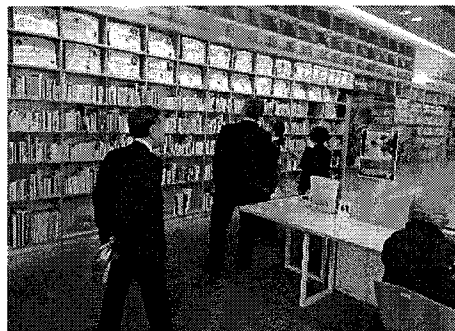
建物は免震構造を採用し、近くを流れる隅田川の氾濫被害の想定から発電機や蓄電池が5階に設置されており、災害時には防災拠点となる。乳幼児や妊産婦を中心とした二次避難所としても利用される。また、隣地の芝生ひろばには、マンホールトイレや防火水槽が整備されている。

■所見

荒川区では、ゆいの森あらかわが開館した翌年の平成30年5月に「読書を楽しむまち・あらかわ」を宣言、さらに令和5年4月に「荒川区豊かな心を育む読書のまちづくり条例」を施行し、読書を通じて、区民や団体、事業者など、地域が一体となって、あらゆる世代が生涯にわたって豊かな心を育む読書のまちづくりを進めており、その拠点となっているのがゆいの森あらかわである。

また、荒川区の将来像「幸福実感都市あらかわ」のシボルの一つとして、利用者が自ら学び体験し、人と人が交流できる地域の文化やコミュニティの拠点ともなっている。

施設内を見学させていただき、この施設のコンセプトが各フロアの随所に具現化されており、担当職員の方々



の説明からも、まさに荒川区が他に誇れる施設であるとともに、荒川区以外の方に同区をPRするための施設であるとの言葉も納得できるものであった。

1階にはコーヒーチェーン店が運営するカフェがあり、貸出前の図書を持ち込めるほか、図書館のフロアにも飲食が可能なスペースがあり、長時間の滞在が可能となっている。施設内を案内していただいた際も、平日の午前中であつたが、中央に吹き抜けが設けられ、ゆったりとしたテーブルや椅子が配置された広々としたスペースの中、幅広い年代の方が図書の閲覧だけでなく、パソコンの操作や書き物など、思い思いに過ごしている様子が見受けられ、館内の空間の居心地の良さを強く感じた。

地下駐車場の駐車可能台数が12台である一方、自転車の駐輪場が300台分あるとのことで、同施設の立地する周辺の状況も想像され、地域住民にとって利用しやすく、大切な施設であることが伺えた。

本市においても、村上駅周辺まちづくり事業が進められているところであり、その中核となるのが、周辺のにぎわいを創出し活気をもたらしするための「複合施設」である。しかし、すでに用地周辺には教育情報センターや生涯学習推進センター、観光案内所、数キロ圏内には市民ふれあいセンター、子育て支援拠点施設、総合文化会館などが存在しており、新たな複合施設の中核の機能をどのようなものにするのか、十分な検討が必要である。本市の将来を踏まえ、新たな複合施設の機能や目的などその在り方は大変重要である。今後、新たな複合施設の具体的な設計が示されると思うが、同事業が本市の将来や市民の幸福度にどのような成果をもたらすものか注視していきたい。

② 群馬県利根郡川場村 「道の駅 川場田園プラザ」について [現地調査]

川場村は群馬県北部に位置し、日本百名山である武尊山の南麓に広がる自然豊かな農山村である。総面積85.25 km²のうち山林が86.5%を占める。4つの一級河川が流れていることから、村名も川の多いところ由来している。

様々な高原野菜や果物が生産され、酪農も盛んである。また、武尊山からの水で育てられたブランド米「雪ほたか」が知られている。



村の人口は3千人弱であるが、人気の道の駅川場田園プラザや川場スキー場などにより、年間約250万人の観光客があり、村の主産業である農業と観光を合わせた「農業プラス観光」の村づくりをしており、『田園理想郷 農業と自然の里「川場」』が村のキャッチフレーズとなっている。

■施設の概要

同道の駅は、県内外から200万人以上が訪れる群馬県内屈指の観光スポットとなっており、旅行情報誌が発表する道の駅ランキングでは、2022年と2023年に連続して全国1位を獲得し、競争が激しい関東エリアの道の駅において、常にトップクラスの人気を誇っている。

若干勾配のある広い敷地内には、ラーメン、手打ちそば、パスタ、地ビール、ピザ、おにぎり、食パン、クレープ、ソフトクリームなど様々な飲食店や、地元で生産された野菜や特産品の物販店が配置されている。また、「家族で一日楽しめる道の駅」と謳っているように、飲食も自由にできる休憩スペースの川場ルーフのほか、しゃれたオープンテラスも多く設けられており、訪れた方各人がそれぞれにゆったりと時間を過ごせるよう配慮されている。

施設の運営・管理は、川場村が48.9%出資（他12団体）する第3セクターの株式会社田園プラザ川場が行っている。平成5年（1993年）設立。事業費31億4千万円。従業員数140名（社員40名、パート・アルバイト100名）。〈道の駅田園プラザ川場HPより〉

■所 見

道の駅田園プラザ川場は、関越自動車道練馬I.Cから沼田I.Cまで約90分、さらに一般道をまで車で10分ほどの所にある。関東・東京圏からの交通の便は比較的良い一方、道の駅そのものは国道や幹線道路に面しておらず、まさに目的地としての道の駅となっている。

視察は3月下旬のシーズンオフの時期、平日の午後ということもあり混雑している状況ではなかったが、関東圏の県外ナンバーの車が多く駐車していた。道の駅全体の雰囲気や、それぞれの施設を見て回って、日本一人気のある道の駅との評価や、来場者の7割がリピーターと言われる所以も大いに納得のできるものであった。

広い敷地内に点在する様々な飲食店、地場産のブランド米や野菜などのほか道の駅内で製造されたヨーグルトやチーズが並ぶ物販施設、地ビール工場に併設されたレストラン、その他子どもから大人まで楽しめるアスレチックスペースも整備されている。各飲食店ではそれぞれ地場産の原材料使用したレベルの高いメニューを提供しており、また、道の駅敷地内で製造・販売される乳製品や地ビールの存在は、食品の安全性や新鮮さをアピールするものであり、道の駅の集客に大きな効果をもたらしていると認識した。また、川場村産のフルーツを使用したこだわりのスイーツや厳選した地元のプレミアム商品を販売するギフトショップなどもあり、施設運営のセンスのよさも感じられた。

道の駅田園プラザ川場は、広い駐車場やセルフサービスのフードコートからなる近年の大型の道の駅とは一線を画している。一つの建物の中で買物や食事ができるような利便性はないものの、敷地内を散策する楽しみや、さわやかな屋外でのんびりとした滞在、また、フードコート方式よりも食事内容が本格的であり、リピーター率の高さにつながっているのではないか。



道の駅を構成する大切な施設の一つであるトイレについては、来場者が多いことから何ヵ所にも配置されていたが、飲食店の店舗などの景観や人の流れに配慮されているのか、建物の奥まった場所にあり、少し場所がわかりにくい印象であった。トイレそのものは清潔感がありきれいに管理されており、広々とした好感の持てる空間であった。

道の駅川場田園プラザが日本一人気のある道の駅と評価されるに至ったのは、昭和50年代から取り組まれた川場村の村づくりによるものだが、その後の取組において、二つのキーポイントが見られる。一つは、平成5年（1993年）の株式会社田園プラザ川場の設立、二つ目は、東京

都世田谷区との昭和 56 年（1981 年）「区民健康村相互協力協定」（縁組協定）締結から始まった交流事業の存在である。これらについては日程等の都合で調査できなかったので、今後機会を捉えて調査したい。

本市においても、道の駅朝日のリニューアル計画が進められており、令和 9 年度のメイン施設オープンに向けて、7 年度から工事が本格着工する。しかしながら、メイン施設オープン後の既存の物産会館や食堂の建物の利活用や、新たな施設の整備などについて、方向性は決まっていない状況である。目的地とされる道の駅とするためには、新たなメイン施設と併せて既存の様々な施設をどう活かしていくかが不可欠である。道の駅は高速道路のサービスエリアとしての機能のほか、地域住民の交流の場としての機能も重要である。日沿道の延伸とともに、鶴岡市温海地区や遊佐町でも既存の道の駅が移転して新たな道の駅として整備されることから、より魅力ある道の駅としなければ通過点となってしまうことが大いに懸念される。今回の道の駅川場田園プラザの視察は、道の駅朝日の現状を客観的な視点で捉え、人を呼べる道の駅とはどういうものかを考察するうえで大変参考となるものであった。

以上、報告します。